

## 源氏物語夕顔卷の発端

——「心あてに」「寄りてこそ」の和歌解釈——

工藤 重矩

(平成十二年九月一日受理)

### 一 はじめに

夕顔卷冒頭の和歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」につき、かねて注釈書等の説明に疑問を抱いていたのだが、清水婦久子「光源氏と夕顔」(『源氏物語の風景と和歌』平成九年 初出『青須我波良』四六号 平成五年)にはほぼ正解に近い解釈がなされているのを知った。同時に、なお修正が必要と考えるところもあった。清水論文は今後、広く採用されるであろうことを思うと、修正すべきは修正しておくべきだと考えた。それが本稿を草する理由のひとつである。

清水論文が正しければ、和歌の誤読に基づく従来の多くの議論はその根拠を失う。「それ」に源氏を当てることも頭中将と誤解したとする黒須説も、「夕顔の花」に女あるいは源氏を当てることも、和歌の解釈からは否定される。ところが、その後も従来の議論が継続されており、例えば、鈴木日出男「夕顔物語の主題」(『国語と国文学』平成十年十一月号)においても藤井貞和「かの夕顔のしるべせし隨身ならびに惟光の会

話文の一節」(『学芸国語国文学』三三三号 平成十二年三月)においても依然として誤った本文解釈による論がなされている。

いつの場合も正確な本文解釈がまず必要だと考えるので、ここに清水論文を取りあげ検討を加えたいと思う。それを通して、「心あてに」の和歌解釈の基本線には既に議論の余地のないことがひろく理解され、正しい解釈に拠って夕顔卷が論ぜられることを希望する。それが本稿を草するいまひとつの理由である。

議論の跡をたどってみると、意外にも問題の核心である和歌そのものの本格的な検討は殆どなされていない。黒須重彦氏の新解釈(「白き扇のいたうこがしたる」昭和四十六年及び「夕顔という女」昭和五〇年)以降は、和歌の解釈とくに「心あてに」と「寄りてこそ」の歌の「それ」に誰を当てるか、夕顔の女をいかに理解するかに議論が集中したごとくであり、ようやく平成五年の清水論文において和歌に即した検討がなされたかに見える。清水氏は、従来の解釈を「これらの歌を正確に捉えたものは見あたらない」全て和歌の伝統を無視した読み方になっている

と批判している。ただ、清水氏以前にも類似の解釈をしている論文はあり、類似の方法を用いて検討を加えた論文も存在する。清水論文には引用されていないそれらの論文もあわせて検討をくわえたい。

## 二 「心あてに」の和歌をめぐる

### (1) 「心あてに」の語義 — 古今和歌集二七七番歌の解釈 —

夕顔巻の「心あてにそれかとぞ見る」の和歌を解釈するためには、従来の議論では正しい理解がなされていなかった「心あてに」の語義の確認から入らなければならない。夕顔巻の和歌が、古今和歌集秋下二七七番凡河内躬恒の

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

に関連あることは、あらゆる注の指摘するところである。清水論文もこの歌との関連を重視しているが、「心あてに」の語義については従来の解釈にさほど深く疑問を抱いていないように見える。そこで、古今和歌集の「心あてに」も含めて、この語の意義を明確にしておきたい。

現在、「心あてに」は「あて推量で」と多くは訳されている。辞典でも「当推量。あてずっぽう。」「(角川古語大辞典)と説明されている。古今和歌集の最新(平成十年)の注である片桐洋一『全評釈』も、

あて推量で折るならば、あるいは折れるだろうか。初霜が置いて見る者を惑わしているこの白菊の花は。

とあり、金子『評釈』・古典大系・松田『新釈』・竹岡『全評釈』・旺文社文庫・新古典大系・新編古典全集等みな「当て推量で」と訳しており、近世の宣長の遠鏡も「タイガイスイリヤウデ」と、季吟の抄も「推

量して」とする。みなこの語について詳しい説明はない。

ところが、「当て推量で」とはやや趣を異にする注釈書がある。

それと見當をつけて折るならば折ることもできようが、漫然と折ろうとは折れそうもない。初霜が白くおいて、どれが白菊やら霜やらわからぬ庭の白菊は。

(西下経一・朝日古典全書 昭和三十三年 \*四三年版による)

もし折るのなら、よく見當を定めて折ることにしよう。初霜がおいて、どこがありかだかわからなくなっている白菊の花は。

(奥村恆哉・新潮社古典集成 昭和五十三年)

私の見た限りでは、右の二書のみであるが、この二書が右のように訳しているのだから、あるいは他にも同様の方向で訳をしている注が、百人一首の注をも見あわせれば、もつとあるかもしれない。私自身もかつて『短歌』平成元年一〇月号(角川書店)の「古典秀歌鑑賞」欄に躬恒の歌をとりあげ、「心あてに」につき次のように書いている。

歌意―見當をつけて折るならば、折ることもできようか、初霜が置いてどれが花かと、見る者を迷わせている白菊の花は。「折らばや折らむ」は、もし折るとならば、あて推量で折ることになるか、の意とも解し得る。「む」に可能の意を含めるか、単に推量とするかの違いである。(中略)「心あて」は、あて推量と訳されることが多いが、あてずっぽうとか、適当に推量するとかの意ではない。

これが「菊の」花だとはつきり心で見當をつけること。もつと具体的に言くと、「菊の」花びらはこんな形で、葉はこんな形のはずだから、同じように白いけれども、おそらくこちらが「菊の」花だろうと考え、見當をつけて折るのを、「心あてに折る」という。この語のニュアンス、注意を要する。

(引用に際しての注) どうしたわけか、破線の部分、「あて推量で」としているが、当然「見当をつけて」とあるべき所。また、「む」は推量の用法とする方がよいであろう。可能の意は、文脈によってその趣を持つのであって、「む」が本来的にもつ意味ではない。「菊の」は今回補った。

諸注釈書が「当て推量で」と訳すとき、どちらかと言えば「あてずっぽう」の意で理解しているように思われる。源氏物語夕顔巻の和歌においても、諸注釈書はこれを「あてずっぽう」の方向で理解し、そのことが和歌解釈の明晰を欠きかつ夕顔の女の行為への誤解の一因ともなっているのである。そこで、まづ「心あてに」が「心にはつきり見当をつけて」へ心に思い定めての意であることを確認しよう。

「心あて」の用例検討は清水論文においてもなされているが、なおその意義は明確にされていない。清水氏は「『心あて』は『いとしく思ひあてられ』ることではなく、あくまでも推量の域を出ないことを表すことばである」(三九二頁)とも「『心あてにそれかとぞ見る』もまた、(中略)何かにさえぎられてはつきりとは確認し難いものを『それ』かと推量する意味なのである」(三九六頁)とも説明し、夕顔巻の和歌を次のように口語訳している。

(本当にあの賤しい花なのかどうか、白露の光がまぶしくてはつきりとは見定められませんが) おそらくはその花だろうと見当をつけています。「白露」(あなた様)がその光を添えて(下ったおかげで)白く輝いて見える夕顔の花を。(三九七頁)

いま傍線を施した部分が「心あてにそれかとぞ見る」にあたる。これには朝日全書・古典集成に近い語感もあるが、また「『心あてにそれかとぞ見る』といった当て推量ではなく」(四〇五頁)とも「『心あてに』

などと、はつきりしないことを詠んで来ようはずもなく」(三八九頁)ともあるので、通説的理解である「当て推量」に近い理解をしているのであろう。「心あて」が推量の域を出ないのは疑いないが、その推量は、〈既知の情報に照合しての確信に近い推量〉である。

夕顔巻では「心あてに」が「いとしく思ひあてられたまへる御そばめを見過ぐさで」との関連で論議されてもいた。「心あてにそれかとぞ見る」の「それ」に光源氏等を当てる説(これが誤りであることは後述する)の中には次のように言うものもある。

そもそも「心あてに」の歌で夕顔側が源氏といい当てたと解するのはまちがいである。いい当てたのではなく推測、当て推量である。

(中略) いい当てられたと思っているとす証拠に從來「まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御そばめを見過ぐさで、云々」を考えているようだが、(中略)「いとしく思ひあてられたまへる」とは随身の思いこみにすぎないのだ。源氏自身は「いとしく思ひあてられたまへる」とは思っていない。(中略)あくまで「心あてにそれかとぞ見る」で、はつきり見定めたといっているわけではない。

(森一郎『源氏物語生成論』昭和六一年 二八頁)

右の記述は二重の誤りがある。ひとつは「心あてに」の語義の誤解。

いまひとつは「それ」に光源氏(頭中将でも同じ)を当て「心あてに」との間に矛盾を生じると考えたこと。詳しくは後に述べるが、女が「心あてにそれか」と見た対象は植物の「夕顔の花」である。心に思い当てては確信に近い推量でその花を夕顔と見たと表現した。後文の「いとしく」云々は、女側では、遠くからでも車の男が誰とはつきり思いあつたと言うのである。ふたつは別の事を言っている。

ちなみに、古今和歌集の古注が「こころあて」を「心あてとは、心におもひあつと云也」と説くのは、「いとしく思ひあてられ」と同じとの理解であろう。既知の情報に照らし合わせての推定である。

さて、やや順序が前後したが、鉄則どおり「心あて」の用例検討をおこなう。おのづから清水論文の挙例と重なるが、まず「心あて」が「あてずっぽう」の意ではあり得ないことが明白な例から示す。

①心あてに見ばこそわかれ 白雪のいづれか花のちるに違へる

(後撰集冬 四八七 読人不知)

②心あてに分くとも分かれ 梅の花散りかふ里の春のあは雪

(続後撰集春上 二六 藤原定家)

①も②も古今和歌集の躬恒の歌によっている。①の場合、へ「心あてに見れば見分けられるだろうが、そうでなければ、白雪のどれも白い梅花の散るのと違ってないのだから、見分けられない」の意であるから、この「心あてに」見るは、あてずっぽう(あて推量)に見るのではなく、心にはつきりと見当をつけて見るの意でなければならぬ。新大系『後撰和歌集』の注は「『当て推量なら見分けられよう、しかし確信をもっては見分けられない』と逆説的に言った」とする。新大系の訳には「当て推量で見ると見分けられるかもしれない」とあるが、その論理的不備を説明しようとして二重の誤りに陥っている。①で言っているのは、〈見当をつけて見れば見分けられるが、漫然と見ていては見分けられない〉ということである。朝日全書が古今和歌集二七七番で「漫然と折ろうとしては折れそうもない」と補うのは的確である。

②は、古今和歌集二七七番に加え①をも踏まえて、しきりに散る白い梅花と春の淡雪とは、へたとえ「心あてに」見分けようとしても、見分

けられないだろう」という。へたとえアテズツポウデ見分けようとしても、見分けられない」という理屈はありえない。論理的に傍線部分は見分け可能な方法であるべきだから、「心あてに」は「当て推量に、あてずっぽうに」の意ではなく、既知の知識情報と照らし合わせ、「心に思い定めて、見当をつけて」の意であることが理解されよう。

他は挙例を省略するが、紫式部集八二番と源氏物語の例は同じ作者の用例であるから、参考までに見ておこう。紫式部集八二番は、年を経た卒塔婆が転がり倒れ、通る人に踏まれているのを見ての詠。

心あてにあなかたじけな昔むせる仏の御顔そとは見えねど

第五句は「そ(仏の御顔)とは」に「卒塔婆」を掛ける。昔むしているのも、一見して卒塔婆とは見えないが、仏の御顔だと見当をつけると(具体的には、卒塔婆の形を思い浮かべ、形からしてその昔むした石、板碑を卒塔婆に違いないと見当をつけた)ああ畏れ多いこと、仏の御顔を踏むなんて、の意。

源氏物語帚木巻の、源氏の得た恋文を頭中将が見る場面。

片端つつ見るに、「かく様々なるものこそ侍りつれ」とて、こころあてに「それか、かれか」など問ふなかに、言ひあつるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふもかしと思せど(五六頁)

この例も「あてずっぽう」に名を挙げるのではなく、頭中将は、心に思い当たるところをいろいろ考えて(筆跡などから見当をつけるのである)、「それか、かれか」と問うたのだ。頭中将としてはある程度は確信があるということであり、だからこそ「言い当つるもあり」思ひ寄せて疑ふ」こともするのである。

(2) 心あてにそれかとぞ見る

「心あてに」が前節に述べたような意義だとすれば、夕顔巻の扇に書かれた女の歌「こころあてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕顔の花」は、どのように解釈できるだろうか。この和歌の構造は、心あてに、それかとぞ見る、白露の（ガ）光ヲ添えたる夕顔の花ヲ。であり、「それ」は当然に「夕顔の花」を指している。それ以外の分析は成立しない。これは清水論文の重要な指摘である。

「それ」の語を含む和歌表現の特徴については清水論文も用例を挙げて指摘し、また藤井日出子『源氏物語「夕顔の巻」』（『解釈学』七輯平成四年六月）も清水氏と同じ方法で分析しているが、両氏の論文によれば、和歌の中に「それ」が用いられる場合、ほぼ歌の中に「それ」の具体的な内容が示されているという。両氏の挙げている例に別の例も加えて、そのような和歌をしめす。

③月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける

（古今和歌集春上 四〇 躬恒）

④巡り逢ひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな

（紫式部集 一）

⑤しらぬまの菖蒲はそれと見えすとも蓬が門は過ぎずもあらなむ

（物語二百番歌合 十番右 狭衣物語）

⑥心あてにそれかとぞ見る 桜花かすみの関の春の夕暮

（光経集 三二五）

⑦今朝はみなそれかとぞ見る 志賀の浦や雪のいづくか春の花園

（統草庵集 三三二 「湖辺雪」）

右の「それ」は傍線を施した「梅の花」「月」等々を指す。⑤の物語二百番歌合の例、かの夕顔の歌と合せられている。⑥⑦は、上句に「それかとぞ見る」を持つ和歌。みな「それ」の内容は下句に含まれている。

⑥は、霞のかかった関の春の夕暮に咲く桜花を、はつきりとは見えないので、見当をつけてそれ（桜花）かと見る、の意。⑦は、志賀の浦は雪がどこに降っているというのか、今朝は一面春の花園かと見ることで、の意。雪を花に比喩した。

上記諸例の和歌に

心あてにそれかとぞ見る 白露の光そへたる夕顔の花

を並べて見れば、「それ」が「夕顔の花」を指すことに疑問の余地はないであろう。「心あてにそれかとぞ見る……夕顔の花」は、夕顔の花を心あてにそれ（夕顔の花）かと見る、の意。細かに説明すれば、夕暮の薄明りのなかで、夕顔の花はどれかな、夕顔の花はどれかな、と探し求めて、白露が光を添えているので一層白く見える夕顔の花を、これがそれ（夕顔の花）だと見当をつけて見定めた、ということである。

現在の通説的解釈として、「それ」を光源氏とし、「夕顔の花」も夕日をうけた美しい源氏の顔を比喩するという理解がある。その一例として岩波新古典大系の口語訳を示せば、次のようである。

推量ながらあなたさま（源氏の君）かと見るよ、白露の光をつけ加えている夕顔の花を。

他の注釈書・論文も同じパターンの口語訳が多い。この理解が構文の理解として誤りである所以の説明はもう繰り返さない。括弧を削除してみれば、「（この夕顔の花を）」「推量ながらあなたさまと見るよ」という表現の不自然さは明白である。夕顔の花を源氏に比喩したとする理解の非は、黒須重彦『夕顔の女』の強調されたことで、「それ」が頭中将のこととする主張は誤りであるが、夕顔の花が源氏を比喩しないという点には、そのまま認めなければならない。夕顔の家の女が「あやしき垣根に咲く」「口惜しの花の契り」を持つ「枝もなさけなめる花」を光源氏

(車中の貴人)になぞらえて和歌を贈ることはないであろう。

穴山孝道「夕顔の花―歌の倒叙的解釈についての疑問―」(九大教養部『文学論輯』五号 昭和三十三年)は上句下句独立した二文と見なし、夕顔の花はただ垣に咲いている夕顔の花を意味するのみとて、「あて推量ながら、この夕顔の花をお召しなされた方は、多分あのなにがし様でいらつしやることと存じ上げます。これこそお召しの光栄を賜はつた、その夕顔の花でございます。」と解釈している。夕顔の花に光源氏を寓するのを不可とする立場からの工夫であるが、上述のとおり、この和歌構文を二文とするのは適切ではない。

寓意の問題としても、「それ」が「夕顔の花」とは別の何かを比喻することはない。「夕顔の花(人の顔)」を「源氏(あるいは頭中将)か」と見る、という比喻も成り立たない。和歌の構文として、へ「夕顔(顔)」を「それ(顔)」と見ました」としかならないからである。和歌として、「それ」は植物としての「夕顔の花」しか意味しない。けつして「謎めいた多義的な歌」(日向一雅「帚木三帖の主題」『源氏物語研究集成第一巻』平成一〇年)ではない。そこが夕顔巻の和歌理解の根本である。「心あてに」の和歌から派生する諸問題、詠歌意図、誰の作か、夕顔の性格、等々はここを出発点としなければならない。

この和歌は花を源氏や頭中将やに比喻したものではない。花を扇に載せて奉るにあたって「これが夕顔の花だと見当をつけて手折りました」と言っている歌である。

試みに現代語訳する。

(夕暮れのなかで、はつきりとは見えませんので)見当をつけて、たぶんこれがその夕顔の花かと見ました、白露が光を添えている夕顔の花を。

### (3) 躬恒の歌との関連 ―「それ」が指すもの―

夕顔の和歌の基本的構文の理解については、清水婦久子氏も藤井日出子氏も同じであり、用例を示しての検討は見るべきところが多いのであるが、「こころあて」や「それ」の具体的な文脈での理解となると、本稿とやや異なるところがある。その検討を行う。

清水婦久子氏は夕顔歌が躬恒歌と同じ発想で詠まれていることを重視し、かつ和歌における「それか」の用法の特徴から次のように言う。

つまり、夕顔巻の「心あてにそれかとぞ見る」は、<sup>①</sup>詠み手がかつて見たこともない人物の正体を推量することではなく、ほのかに見えていながら何かにまぎれてはつきりとは確認し難いものを「それか」と推量する意味なのである。<sup>②</sup>「それ」の正体は、他の和歌では常に歌の中で明示されていた景物(多くは花)を指すから、この場合も「夕顔の花」かどうが見定め難いと言っていることがわかる。<sup>③</sup>この歌は、「白露の光」にまぎれて「白き花」が「夕顔の花」だと確認し難いから、「心あてに」と詠んだものだったのである。夕顔の女君の歌を口語訳してみよう。

(白露の光がまぶしくて見定められませんが)おそらくその花だろうと見当をつけています。「白露」(あなた様)がその光を添えて(下さったおかげで)白く輝いている夕顔の花を。

(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夕顔』平成十二年一月)『鑑賞と基礎知識』は論文「光源氏と夕顔」の再録(要約)である。趣旨は変っていない。傍線部①は清水氏の繰り返し主張するところで、和歌の表現から見ればごく正当な主張である。「それ」に光源氏であれ頭中将であれ、人物を当てようとする多くの論文はみな誤りである。既

に滝澤貞夫「夕顔の巻私解」(『信州大学教育学部紀要』六〇号 昭和六二年八月)にも「折に合った洒落た風雅な所為と理解し、人物詮索にまで踏み込まなければ、こうしてすべての疑問点は消滅する。夕顔の巻には作者の不用意な失策、無為無策や矛盾は存在しなくなる」と述べられているが、残念なことに、氏の和歌解釈それ自体には賛成できない。

傍線部②は疑問。これは「それ」「それか」などの検討から導かれた考えて、藤井日出子「源氏物語」夕顔の巻(平成四年六月)もまた

「それ」という語は、ただ単に「ある物を特定する」というのではなく、「二つがよく似通っているために、特定する物の見分けがつかない状態において、特定する時」に使用されていることが分かる。なお、用例からは特定する語が、歌中に含まれるといえよう。

と言う。清水論文の傍線部③とほぼ同じ結論に達している。なお、藤井論文は、夕顔の花を光源氏に比喻していると考えている。

確かに、両論文に挙げられている用例を通覧するとそのようにも見えるが、「ここであてに」との関連で例歌を求めたので、おのづからこのような傾向の歌が集まったのである。「それ」の語自体が藤井論文・清水論文のいうような傾向性を持っているわけではない。紫式部集の

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな

を例にとれば、「それ」が「月」を指していることは明白だが、「月」が何か似た物と紛れて見分けがたいという状況ではない。あつというまに雲に隠れてはつきり月だと見分けられなかったというのみ。

したがって、清水論文傍線部④⑤に、「白露の光」に「白き花」が紛れて、その花が「夕顔の花」だと確認できなかった、というのは不審。「白菊」と「初霜」、「白雪」と「白梅」は、和歌では紛れて見分けられないとして詠まれるが、「白露」と「夕顔の花」とが「よく似通って

るために、特定する物の見分けがつかない状態(藤井)になるとは思えないし、「白露がその光を添えたことで見えにくくなっている『夕顔の花』なのである」「白露の光がまぶしくて見定められない(清水)」というのも不自然である。後にも述べるが、和歌の表現としてもそのようには言っていない。両氏ともに躬恒の「初霜の置きまどはせる白菊の花」と同発想だと考え、これに強く拘束されたための誤りである。

躬恒の歌との関連をどう理解するかについて諸氏の論を見てみると、石井正己「夕顔巻の冒頭について」(『太田善磨先生退官記念文集』昭和五五年)も「物象叙述としては『白露』と『夕顔の花』の白色とがまぎれて映発する幻想的な虚構美を構築している」といい、高橋亨「夕顔の巻の表現」(『文学』昭和五十七年十一月号)は、歌の解釈について深く触れないが、結論的に示された解釈は次のようである。

この歌の「夕顔」を光源氏に喩えたか、夕顔じしんを意味するかなどをめぐって諸説あるが、少くとも表層の意味としてはそのどちらでもなく、「それ」である「夕顔の花」は、花そのものと読むべきであろう。

あて推量に、あなたが求めめなのは、扇の白にまぎれたその花かと思えますわ。白露の光に照り映えて、夕暮に一面はの白く、夕顔の花はよく見分けられませんが。文脈にそって試解しておけば、こんなところであろうか。「白露の光」については、光源氏の美しさを喩えたといえる。

前段はそのとおりである。ただ表層とか深層とかの問題ではなく、和歌表現として、「それ」は花そのものである。後段の解釈、やはり躬恒歌との関連で紛れる対象を求め、「扇の白」との紛れを考えているが、これは不自然。いま傍線を引いた部分、いかにも不合理。清水論文のい

う「白露の光」との紛れと、二重に紛れた形になっている。

滝澤貞夫「夕顔の巻私解」も躬恒歌との関連を言い、

季節は夏だから、「初霜」を「白露」に置きかえた。その白露に夕陽を当てて、きらきらとまぶしく輝かせることによって、「白菊の花」と同様、まっ白な「夕顔の花」を折ろうとしても「心あてに」せざるを得ない状況を言語空間として創造した。

と、清水論文とまったく同じ見方をしている。

田中喜美春「夕顔の宿りからの返歌」（『国語国文』平成一〇年五月号）には清水論文は引用されていないが、例の躬恒歌を引いて

この「心あてに折る」に対応して「心あてに見る」と歌われ、「白菊の花」と「夕顔の花」が対応している。それゆえ、白菊が霜と見分けがつかないのと同様、白露が白く光っている中に咲いている白い花は、花の種類をはっきり識別できないけれど、推測によって夕顔の花と見ると歌っていることになる。

と、これもほぼ同じ理解を示している。ただし、夕顔の花には源氏が寓されているという。

武原弘「『夕顔』巻の文章表現―『心あてに…』の歌の解釈をめぐる―」（梅光女学院大学『日本文学研究』二八号 平成四年十二月）も同方向の解釈をしている。やはり躬恒歌を引いて次のように述べる。

「それかとぞ見る」の対象語は「夕顔の花」であることがただちに了解される。（中略）つまるところ前歌の「それ」は「夕顔の花」を指していると解される。

歌は、薄暮のなかに消えかかろうとしている夕顔の白い花が、夕露の白い光のためにいっそう紛らわしく見える情景を詠出したものである。（中略）

歌において、源氏を暗示する表現は「白露の光」であることが明らかだからである。（中略）その源氏の「光」を受けて美しく輝く「夕顔の花」が再び源氏であっては、歌意は通じない。歌の通釈がしばしば明快さを欠くのは、こうした問題を保留に付したままだからである。

夕顔の和歌の基本的構造についての理解は上述の諸論と同じ。素直に和歌を読めば、それ以外の読みようはない。私は誤りと考えているが、中段の傍線部は清水・高橋・滝澤・田中各氏の論文と類似。後段は的確な指摘である。ところが、同じ武原氏が

ひっきょうするに、この歌の「それ」は「夕顔の花」と「白露の光」とを同時に指示し、全体の歌意としても、表裏二重構成で保たれていると読解するほかない。

として、高橋論文を引用し、表層深層という方向に流れてゆくのは、明快さをみづから手放すことであり、残念である。この和歌の「それ」が「夕顔の花」と「白露の光」とを同時に指示することなどあり得ないのは、武原氏自身が確認したのではなかったか。

#### (4) 白露の光そへたる夕顔の花 ― 寓意は何処にあるか ―

前節に見たごとく、清水論文以外にも幾つかの論文が躬恒の「折らばや折らむ」の和歌によって、夕顔の花の白と白露の光が紛れて見えにくいのだとの理解をしている。しかし、その解釈は躬恒歌との関連を意識し過ぎたために、夕顔巻の和歌本文を無視した解釈となっている。前述のとおり、「それ」「それか」の語を含むからといって二つの物が見分けられない状態にあることを表すとも限らないし、「心あてに」の語があ



るからといって躬恒の歌のとおりの内容であるわけでもない。

「白露の光そへたる夕顔の花」は文字通りに、「白露が光を加え添えている夕顔の花」の意であって、「白露の光」に紛れて「夕顔の花」と区別が付かないの意はどこからも出てこない。

「光」が「添ふ」と詠む和歌は、既に黒須重彦『夕顔という女』が例を挙げて説明を加えており、その結論もただし。ここでは「光そへたる」を含む和歌の例をあげる。平安時代にはその例はないようなので、みな鎌倉時代以降の例であるが、用法に違いはない。

⑧うつろはぬまがきの菊の白露に光そへたる山の端の月

(光経集 六九 月前菊)

⑨明け渡る山の端さむきあか星の光そへたる夜半の白雪

(詠十首和歌 一〇六 暁雪)

⑩身にあまるめぐみも花の折を得て光そへたる月をみるかな

(続後拾遺集春下 一三一 法親王覚助 月五十首)

⑪結びおく露をば月の宿りにて光そへたる庭の白菊

(龜山院御集 二七三 庭月照菊)

⑫数ならぬ宿りゆかしきかいま見に光そへたる花の面影

(卑懷集 一七三 疎屋夕顔)

⑬暮れてなほ光そひゆく夕顔は月の桂の露や置くらむ

(卑懷集 一七四 夕顔暮露)

⑭白露の玉もて結へるませのうちに光さへ添ふとこなつたの花

(新古今集 二七五 高倉院)

⑧⑨は鎌倉初期。⑧は白露に月光が加わる、⑨は白雪に明星の光が加わるの意である。⑨下句の構文は夕顔巻と同じ。⑪は露に月光が映って白菊にその光を添え加わっている情景。⑫⑬の卑懷集は室町時代の歌集

であるが、源氏物語夕顔巻の面影取ゆえ例示した。⑬の月の桂の露は月光を受けた露。その露ゆえ、日は暮れても、夕顔の花に光が加わってゆくと詠んだ。⑩は、君恩ゆえ花が折を得ている上にさらに光を加わえている月を見る、の意。⑭は黒須重彦「再度、夕顔という女」(『源氏物語探索』平成九年)に指摘されている例。いずれも輝きを増すさま。

これらの和歌をみても、また「添ふ」の語義からしても、「白露の光そへたる夕顔の花」は、白露が光を添えて(「そへ」は下二段活用であり他動詞的用法と見て、のを主格の用法と解した)、夕顔の花がいつそう白く見える情景を表現していると理解するのがよいであろう。

夕暮れ近いので、白い夕顔の花も見えにくいのですが、白露が光を添えて白く輝いて見える夕顔の花を、心あてに(見当をつけて)それ(夕顔の花)かと見て、折り取りました、の意。白露の光ゆえに夕顔の花をそれと見分けることができた、と、「白露」を車中の貴人(光源氏)に寓して感謝・賛辞を加えている表現である。早く弄花抄等が「光そへたるは、源氏によそへたるなり」と言うところであり、「露」が恩恵や愛情を比喩することは、黒須重彦『夕顔という女』の二五頁以下を参照されたい。寓意としては、貴人(光る君)が夕顔の花に殊更御目をとどめ、召されることになったのを「白露の光そへたる」と言った。

寓意について説明を補う。「光添へたる」は、表現として直截に「光る君」を指しているのではない。「光」は恩顧の寓喩である。例えば、春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

(古今和歌集春上 八 文屋康秀)

は、諸注に指摘されるとおり、春宮御息所(二条后)の恩顧を比喩している。また大和物語十五段、陽成院に召された若狭の御という人が、そ

の後は再び召されることがなかったので詠んだ歌、

数ならぬ身に置く宵の白玉は光みえさすものにぞありける

「宵の白玉」は露。「光見えさす」は光が途中で見えなくなること。恩寵の途絶を寓した。

かくのごとく、言葉としては「光」は恩顧の寓喩である。だから夕顔巻の「心あてに」の場合も、言葉としては貴人の恩顧を比喩しているのであって、「光」が直截に「光る君」を意味しているのではない。

しかしながら、歌を詠んだ夕顔の宿の女の側では、「まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御そば目」ゆえに、「白露の光そへたる」という表現をもつて、車中の人物が貴人であり、陋屋の夕顔の花がその御目にとまった感謝の意をこめ、かつ「光そへたる」に世評の「光る君」をそれとなく添えたのである。

だからこの和歌は、車の人物がもし源氏ではなくても、そのまま使用できる。その意味で、穴山孝道「夕顔の花」(『文学論輯』五号 昭和三年)が「車のぬしを源氏と察しての行為である必要はすこしもない」というのも(和歌そのものの解釈には賛成できないが)一理ある。女の側としては、光る君に違いないとほぼ確信しているのであるが、源氏を見たこともないのだから、もしかして別人かもしれない。そのとき、この和歌を読む人にとって、「白露の光そへたる」は単に貴人の恩顧を寓意するにすぎない。光る君その人が見れば、さては悟られたか、とも読み取り得る、そのように作られている和歌である。誰が見ても光る君を比喩していると分かる和歌を、相手を見定めなまま贈る―作者がそのような設定をする―はずもない。なお、これは森正人「紹巴抄に導かれて」(『室町芸文論攷』平成三年)が言う意味での「表現の重層性」とは別のことであり、森氏の和歌解釈は誤りである。なおまた、白露云々は

貴人の恩顧の比喩だから、実際の景として露があつたかどうかは問う所ではない。

「それ」が人物を指さないのはもとより、「白露の光」も源氏を直截に比喩しているわけではない。だから、光源氏はその後もすぐには正体を明らかにすることをしないのであるし、女の方も男が光る君だとの確認が得られなくて、車の行方を追わせたりするのである。このこと、清水婦久子氏の論文もふくめて、従来の諸論に欠けている視点である。

なおまた付言すれば、「心あてに」の和歌は、隨身が手折ったのではなくて、家主が夕顔の花を手折って貴人に奉るさいに添えた歌だといふかたちに詠まれている。このことも、この和歌を理解するうえでは、次節の問題との関連として重要なことであろう。

##### (5) 詠歌の事情 ― 女から呼びかけた歌ではない ―

源氏物語夕顔巻の冒頭。大式乳母を五條に見舞った光源氏は、惟光が門を開けるのを待つ間、傍の家の切懸だつ物に這いかかつて咲く白い花に目をとめ、古今和歌集の「うちわたす 遠方人にもの申す我 そのそこに 白く咲けるは何の花ぞも」の一部を「遠方人にももの申す」と独り言のように言う。それを聞いて隨身が「かの白く咲けるをなむ夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべる」と答えると、源氏は「くちをしの花の契りや、ひと房折りて参れ」と命ずる。隨身が門から入って夕顔の花を折り取ると、女童が出て来てさし招き、「これに置きて参らせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて香を薫きしめた白い扇を差し出した。大式乳母の見舞を終えた源氏は、さきほどの扇を取り出し、紙燭を召して見てみると、歌が書かれている。

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

そこはかとなく書き紛らわせた筆跡が、意外にも上品で由緒ありげだったのに興味をもった源氏は、筆跡を「いたうあらぬさまに書きかへ」て歌を返した。

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのほの見つる花の夕顔

夕顔巻をめぐる問題点のひとつは、「心あてに」の歌を詠んだのは誰かである。またひとつは、なぜこの歌を詠んだのかである。夕顔巻の和歌のように、日常の中で詠まれた和歌、それが物語の中であつてもそのようなものとして設定されているかぎり、その和歌を理解するには、それがどのような状況で詠まれたかが、理解の前提となる。

源氏が大式乳母邸の門が開くのを待つ間に、夕顔の家の者たちは興味津々に簾越しに源氏の車を見騒いでいた。源氏の「遠方人にも申す」と言う声や、随身の返答、源氏の「ひと房折りて参れ」の声が、家の中の女たちに聞こえたかどうかはわからない。聞こえなくても、随身の身の動きから夕顔の花を話題にしていることは察せられたであろう。そして、随身が庭内に入ってきて夕顔の花のある方に向かえば、夕顔の花を手折りにきたのだと分かったはずである。

車の貴人はどうやらあの評判の「光る君」(桐壺巻に「世の人、光る君と聞こゆ」とある)らしいと女たちは見なしている。犬養廉「夕顔との出会い」(『講座源氏物語の世界 第一集』昭和五五年)海原千里「夕顔巻四首の和歌について」(『国文目白』三二号 平成三年)も指摘するごとく(ともにその和歌の理解には従えないが)、隣家の大式(大式の乳母)が源氏の乳母であつた女性だということを、夕顔の家の人は知っていたのではなからうか。その隣家に、やつしているとはいえ常ならぬ車

が停まれば、そしてちらとも顔を見れば、「まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられ」―「光る君」かと思ひ当たるのは自然のなりゆきであろう。頭中将と誤解することはありえない。

「光る君」の随身が夕顔の花を折りに門をはいつてくる。この時、家人はどのように応接するものだろうか。この家には宮仕え人も来通つていたし、夕顔自身も頭中将の寵を受けていたのだから、高貴の人がわが宿の花を折ろうとするとき、風雅のたしなみとして、花を載せる何かを用意しなければと思うのではないか。それで夕顔の花と同じ色の「白き扇のいたうこがしたる」に「心あてに」の和歌を書いてその料とした。「心あてに」は、そのようなものとして詠まれた和歌である。弄花抄等が「さし過たるやうなれど、源氏と思ひやりて、折節のなさけに出したる扇なるべし」と言うのは、上述のごとき理解なのであろう。

意想外のこの折知り顔のしやれた振舞いに、惟光の話を聞いた源氏は「さらば、その宮仕人ななり、したり顔にもなれて言へるかな」と思う。いかにも気の利いた風流ごのみの宮仕人がしそうな振舞いだったのだ。というより、この夕顔の家の住人でそのような振舞いのできる者はその宮仕人しかおるまいと、源氏は判断したのである。

このような歌を詠む行為は、内気な夕顔の女にはふさわしくない、性格的に矛盾する、作者紫式部の失策である、等々という類いの議論とは無縁である。そのような議論の起こる余地のない個人の性格に帰することのできない詠歌状況、物慎みのひどい、はにかみやさんであつても歌を詠まざるを得ない状況なのである。

人から花を求められた時に、花に和歌を添えるのは歌集の詞書にしばしば見られる詠歌状況である。その一例。

男の花かづら結はむとて、菊ありと聞く所に請ひにつか

はしたりければ、花に加へてつかはしける（読人しらず）

みな人に折られにけりとくくの花君がためにぞつゆはおきける

（後撰和歌集 四三六）

なお、扇に物を載せ歌を添えて送ることも、拾遺集五五七（瓜を載せて）和泉式部集七五八（果物を載せて）等にある。

夕顔の花の場合は、詠歌事情はそのようなことだが、白い夕顔の花を載せるのに「白き扇のいたうこがしたる」を用い、扇には「そこはかとなく書きまぎらはし」た「あてはかにゆゑづきたる」筆跡で、折と場とを心得た和歌が書かれている。その予想外の事態に源氏は興味をかき立てられた。高貴なる源氏と陋屋に隠れすむ薄幸の夕顔の女の物語の発端として、夕顔の宿の住人が源氏と交渉を持たざるをえない状況を、ことさらに作者紫式部は設定したのである。

穴山孝道「夕顔の花」『文学論輯』五号 昭和三十三年三月）は、諸説混乱の原因を「贈答の動機についての叙述があまり巧みなため、光源氏が垣根に咲いてゐる夕顔の花を所望したことを宿の人々が覺つて、花と歌とをさし上げたのであるといふ事実関係を看過して、宿の人々が卒爾に花を折つて歌を添えてさし上げたもののやうに、極めて気分的な理會を持つようになつたため」の誤解だと言う。この的確な指摘が後の諸論文に顧みられなかったのは残念である。また「通りすがりに屋敷内に踏み入つて勝手に花を折り取るなど上達部ならば普通のことだつたらしいから、それが誰であらうとも、車中の主のお目に止まつたればこそ折らしめられるのであらうと察して、これに載せて参らせ給へと白き扇をさし出すくらゐの仕業は怪しむに足らない。車のぬしを源氏と察しての行為である必要は少しもないのである。相手を青年貴族と見て取つての心利いたざれ女房の風流なのである」とも言っている。

藤井貞和「三輪山神話式語りの方法」(『源氏物語論』平成十二年 初出昭和五三年) は、「もし好色のうたでないというのならば、この場面で女からさきに男に詠みかけるといふことの理由を呈示しなければならぬ」「折ふしのなさけ」という風流ごときだからといって、女のほうから「さし過(ぎ)たる」行為にでたといふところに、のちの夕顔の引っこみ思案な性格とのあいだの割れ、矛盾は消えない」として、「源氏の君とお見受けしたから、花盗人の行為をゆるしてやろう、ということ。このような挨拶のうた」との考えを示した。「挨拶の歌」を広義にとればその見方には問題ないが、いま私に傍線を施した「女からさきに」云々は誤った前提である。性格の「矛盾」を解消させるべく呈示されたこの考えは、賛同者を得た一方でまた否定的評価も続いた。

石井正己「夕顔巻の冒頭について」(昭和五五年) はその和歌解釈には賛成できないが、詠歌状況については、花盗人との見方を批判したうえで「女が自ら贈歌しているわけではなく、男の側からのアプローチがあつて初めてそれに応じるべく贈歌している」と指摘している。

滝澤貞夫「夕顔の巻私解」(『信州大学教育学部紀要』第六〇号 昭和六二年八月 のち平成十二年『王朝和歌と歌語』笠間書院) も「この場面は、高貴な方が通りすがりに庭の花を所望する訳で、下賤の者にはそれを拒むことなど当時は出来る筈がない。宿の女は、ただ喜んでこの夕顔の花を進呈する外ないのである」「これでは藤井貞和氏が(中略)と説かれたのも、この二人の身分差から見れば成り立たないのではなからうか。『心あてに』の歌は、単に夕顔を進呈する贈物に添えた献呈歌と解すべきであらう」と言う。私の状況理解はこれに最も近い。

穴山、石井、滝澤論文、それぞれの理解に多少のずれ(或いは、かなりのずれと言ふべきか)はあるが、女が積極的に詠み掛けたという理解

に比較すれば、類似の方向の理解といつてよいであろう。花盗人に対する許可の挨拶との見方は、家主がみづから折りとつて奉るかたちに詠歌されてもおり、当人達の意識とは異なるであろう。挨拶ということであれば、せめて「源氏とおぼしき貴公子に敬意を表し、花を所望された喜びを述べた挨拶の歌」（海原千里「夕顔巻四首の和歌について」『国文目白』三一号 平成三年）というべきであろう。「花盗人」は優雅にして曖昧な用語だが、それを今井久代「夕顔巻の『あやし』の迷路」（『国語と国文学』平成八年三月号）の如く、挑発とか切り返しとかへと発展させれば、言葉のあやの範囲を越えて誤りである。

和歌表現そのものについて最も正解に近い解釈を施した清水氏は、詠歌意図を「高貴な人が『花の名』を問うたことに対する答えと挨拶の歌だったのである。これこそが『和歌』の役割であろう」ともいうが、夕顔巻本文の流れからは、源氏は随身の応答で花の名は知り得ており、随身の説明を聞いたうえで「ひと房折りて参れ」と命じたのだから、花の名を問うたことに対する答えの和歌ではない。

なお、新聞一美「夕顔の誕生と漢詩文」（『源氏物語の探求十輯』昭和六〇年）も、夕顔巻では遠方の女性が答えるべきところを近くの男性が答えてしまっているが、「『遠方』つまり夕顔の花咲く家の中に答えるべき女性はいないのである。その女性が光源氏の質問に答えるのは当然ではあるまいか。そこでその女性が『心あてに』の歌を返した」と言う。だが夕顔巻の本文では「遠方人に」云々と聞いて随身が直ちに花の名を答えている。女が光源氏の質問に答えた和歌ではない。

上記諸論文、詠歌状況はほぼ正しく理解しながらも、その多くが和歌の解釈を誤ってきたのは、おそらく和歌（物語）本文への忠実さが不足していたのであろう。本文に即していないということでは、夕顔の性格

との「矛盾」を解決する案として、土方洋一「夕顔の女と物語の生成」（『人物造形からみた源氏物語』至文堂 平成一〇年）は、夕顔巻の展開に任氏伝の影響を論ずる説（新聞一美）を踏まえ、「夕顔巻冒頭の物語展開がプレテクストとしての『任氏伝』や孤独な女が男を招きよせるといふ説話的な発想を複合した上での類型に則っていることを考え合わせれば、女の性格にそぐわないといった類の自然主義的作中人物観に基づく疑問は殆ど問題とするにあたらない」と言っているが、「プレテクスト」など持ち出すまでもなく、夕顔巻そのものの本文をきちんと読めば矛盾も何もない展開なのである。

「心あてに」の歌は、光源氏が夕顔の花を求めたことに対する反応であつて、女から能動的に詠みかけた歌ではない。それがこの和歌の理解の大前提である。源氏が花を求めなければ、夕顔の家の女が歌を詠むこともありえなかった。これはまことに単純明快な事実である。「心あてに」の歌を「挑発」「矛盾」等々とする考えも、この前提の無視と和歌の解釈を誤った所から生じている。「心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花」を上述の前提において見れば、「それ」が誰をさすかと、「夕顔の花」に女（或いは源氏）が比喩されているかとかは、まったく文脈から外れた読み方であると知られよう。

また、この和歌の作者は誰かが、歌の解釈、夕顔の人物像とからんで長く論議されたが、詠歌状況を無視して、詠歌を作者の性格として理解することがそもそも間違いなのである。誰を当てるかによって、夕顔の女の性格の矛盾を論じ、あげくには娼婦性までを云々するものささえあるのは、一体どうしたことだろう。

「心あてに」は家の主（家の者）の立場で詠まれている。個人の立場

ではない。源氏物語の本文で判断すると、「寄りてこそ」の歌を得た女たちが「いかに聞こえむなど、言ひしろふべかれど」とあるから、前の歌も女たちが言い騒ぐ中で作ったのであろう。だがそれにしても、結局は誰か一人が案出し扇に書いたに違いない。光源氏は初めそれを宮仕人だと考え、後々は惟光の報告を聞いて、夕顔が詠んだのだと判断したのである。実際、その後の展開を考えれば、作者紫式部も夕顔が詠んだとして構想していると思われるが、「心あてに」を詠んだ時点では、かの歌は家主の立場で詠まれていること、まだ夕顔は姿をあらわしていないことに留意すべきである。

### 三 「寄りてこそそれかとも見め」の和歌をめぐって

「寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔」の解釈、注釈書等ではおおむね次の二種に分かれる。

A もっと近寄って、誰だかはつきり見たらどうでしょう。夕暮れ時にはのかにご覧になった美しい夕顔を。近寄って確かめてみないか、親しく付き合ってみないか、と誘いかけた歌。

(新潮社古典集成 昭和五十一年)

B 立ち寄って（あるいはもっと親しく近づいて）、はつきりそれと見たいものだ、さぞかし花のように美しいであらうあなたを、いつているだけのことなのです。（中略）そうしたいが、今はそうしているわけにもいかない、そういうニュアンスがここにはあるのです。

(黒須重彦『夕顔の女』三五頁)

「こそ……め」の用法の解釈に従って、Aを勧誘説、Bを意志説と称することにする。古注においても両説あり、河海抄に「近づきてこそそ

れとも見ゆれといふなり」とあるのは勧誘説であろうか。弄花抄の「なれたき心なり。夕顔を女によそへてよめり」は意志説になろうか。近世の湖月抄は「猶もしたしくなれと也」と、はつきり勧誘説である。宣長の玉の小櫛は両説の間で揺れている。朝日古典全書・旧古典大系・旧古典全集は勧誘説。新編古典全集では「もっと近くに寄って、はつきりとお目にかかろうと思います」と意志説に変更されている。玉上『評釈』は「近寄ってこそ誰ともわかるもの」と勧誘説で訳しているが、評には「近づいて見よう、親しくなろう、との気持がこの歌から察せられる」とあつて揺れが感じられる。新古典大系の「近くに寄って見て誰それかと分かうものですよ」は勧誘説のように見える。かくのごとく、近世以降はほ勧誘説で解釈されていたのだが、黒須重彦氏の新解釈の提案があつて、意志説による注釈書もでてきた状況である。

ただ黒須氏以前にも、穴山孝道「夕顔の花」（『文学論輯』五号 昭和三十三年）は宣長の揺れに触れて勧誘説と意志説の問題を取り上げ、かつ意志説を立てている。この論文は、今回読んだ夕顔関係論著には海原論文以外には引用されていなかったもので、ここに取り上げる。

穴山論文は、古注、宣長等における解釈の揺れを検討し、かつ「見つる」「こそ……め」に文法的検討を加え、「寄りてこそ見めの見めが意志表示である」とすれば、その主格は何か。この歌の作者のほかにある筈がない。「この見るといふ述語の主体が源氏であれば見られる客体が女であるべきことは自明であり、花の夕顔を源氏をたとへたとする見解は到底なり立たない。」と言い、

そなたは心あてに私を誰某と判断したといふが、私はまだそなたを何人とも判断する手掛りを持たない。お近づきになつて、そなたが如何なるお人であるかを知りたいものである。美しい夕顔の花、か

のたそがれのすき影にほのぼのと見た美しい夕顔の花咲く垣根の女  
あるじを。

と解釈し、源氏を主体とすれば、「自身の顔容を花の夕顔など自讃する  
といふ不自然さからも救はれる」とも言う。

\*付言する。本稿には扱わないが、「光ありと見し夕顔の上露は」も  
問題の多い和歌で、清水論文では「夕顔の花に光がそえられていた  
と見たのは錯覚だった」とその愛情を疑った」との新解釈を出し  
たが、穴山論文も既に「……ほんの上べのお情けだったとしか思は  
れません。お情けを感謝してゐたのは私の思ひちがいでございまし  
た」と、せい一杯の「控え目な恨み」であると解している。

この穴山論文の解釈は意志説の先蹤となる考えである。ただ問題は、  
穴山・黒須論文のどちらの場合も、人物（女）を見るのだと解している  
点にある。前章に検討したとおり、「心あてにそれかとぞ見る」の「そ  
れ」は植物としての夕顔の花を指す。この「寄りてこそ」の歌は扇の歌  
に対する返しであるから、扇の歌を前提に理解しなければならぬ。そ  
うすると、この歌の「それ」も「花の夕顔」を指すことになる。和歌の  
構文もそのようになっていく。

それを前提とし、いま仮に勧誘・意志を保留にして考えると、「寄り  
てこそそれかとぞ見め」は、

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

の上句の言い方に対して、「寄りてこそ」と強調していると思われる。  
「心当てではなく、近寄ってこそ、夕顔かと見よう（あるいは夕顔か  
と見てみませんか）」の意で、必ずしも逆接的用法でもない。

「こそ……め」は文脈によつては〈勧誘〉の意にもなる。それゆえ古  
注以来その用法とみなす注が続いたのである。仮にその勧誘の意で解釈

すれば、「近寄ってそれ（夕顔の花）かとはつきり見てみませんか、黄  
昏にほのかに見た花の夕顔を」となる。

この場合も「心あてに」の返歌としては、花に近づいてこそそれ（夕  
顔の花）と見分けられると言うのだから、私に近づいて来いと誘ってい  
るのではない。女性からその家に咲く夕顔の花を贈られて、その返歌に  
源氏が自分を夕顔に譬えることはあるまい。また、既に夕顔の花を扇に  
載せて贈ってきたのだから、即ち「心あて」ながら夕顔の花を見分  
けているのだから、女に対して「近づいてこそ」云々と言うのも間が抜  
けていよう。つまり「こそ……め」を勧誘の用法では解釈できない。和  
歌として文脈にそつた解釈ができない。

前に確認したごとく、「花の夕顔」に比喩があるとなれば、夕顔の家  
の女としか考えられない。そうすると、下句の「ほのぼの見る花の夕  
顔」の主体は光源氏となり、上句の「寄りてこそそれかとぞ見め」の主  
体も光源氏となる。「こそ……め」は意志の用法として解釈する以外に  
ない。穴山・黒須論文が意志で解釈したのに従うべきであらう。

だが、黒須氏が逆接的用法として「今はそうしているわけにもいかな  
い」とのニュアンスを補うのは賛成できない。その理由、ひとつには、  
近寄りたいと言っているのに、わざわざ今はできないの含みを持たせる  
必要はないこと。いまひとつには、「こそ」は「心あてに……見る」に  
対する強調であること（穴山論文の口語訳はその理解による）。

清水婦久子氏は「近寄って見たなら（あなたのおっしゃる）それ（夕  
顔の花）かとも見定めることができたのでしょうか。たそがれ（誰そ彼）  
の中でほのかに見たあの夕顔（夕暮れの顔）を」と、上句を「近寄って  
見たなら」と仮定に訳し、「できた」と過去形で訳している。仮定や過  
去を示す語はない。過去のことではなく、将来にわたる意志として解釈

すべき用法であろう。

「寄りてこそ」の和歌を散文で説明すれば、

(あなたは、心あてにそれかと見たようですが、私は) 近寄ってこそ夕顔の花かと見定めましょう。黄昏の中ではのかに見た、あの花の夕暮れの顔を。

とでもなるか。もとより「例のこの方には重からぬ御心」により「いたうあらぬさまに書きかへたまひて」の歌であるから、表面は「心あてに」の歌に应じて、夕顔の花のこととして詠んでいるのだが、「花の夕顔」と言い換えたところに、色めいた寓意のあることは明瞭である。

その寓意、夕顔の花は当然に夕顔の家の女であるから、(あの時は黄昏時ではつきり見えなかつたので、もつと近寄って花のようなお顔を拝見したいですね) ということになる。しかし、まだこの時、光源氏は相手を宮仕人と思つての戯れの言葉である。まだ本当に近づこうと思つてはいない。攻めにも守りにも使えるように打った布石である。

#### 四 おわりに

本稿、清水婦久子氏の論文に触発されて稿を起こした。この修正を是とされるかどうかは、おおかたの判断に委ねざるをえないが、それはそれとして、本稿を草する中で感じたことを最後に記しておきたい。

夕顔巻に限らず錯綜した問題では、後続の論文に頻繁に引用される論文が幾編か出現する。そうしてその論文が作った道筋に従って派生的論文が書かれ、それぞれに枝道がのび、枝道は他の本道とも交差してますます複雑になる。かくして人々は多岐亡羊の思いを抱くことになる。道を失った時、出発点に立ち返るのが最も確実に賢明な方法である。夕顔

巻の問題でも、研究史的道筋の検討はもとより必要だが、それ以上に大事なこととは、出発点である物語本文そのものに立ち返ることである。物語本文を正確に読む以外に解決の方法はない。

研究史ということでは、源氏物語のように関連論文が多量になると、その全てを読むのは不可能に近い。今回、私は夕顔巻の和歌を扱っているものを中心に六〇余編の著書論文しか見ていない。だから、どこかに同じようなことが既に書かれているかもしれない。それを思うと、お互いさまで、筆は重くなるのだが、引用されていけないけれど似たようなことは既に言われていたなあと感じる部分が、どの論文と限らずしばしばあった。源氏物語の論文を書くのは恐ろしいと思う。

黒須氏の巻き起こした論争が三十年を経過して、その主張の要である頭中将説に賛成する意見もあり、頭中将説には賛成しなくても大方が是とする部分もある。ところが、氏が孤軍奮闘して(松尾聡という強力な援軍はあったが)主張してきた説が、氏の名前が示されないまま叢書の改訂版の新注に取り入れられ、それが叢書の説として後続の論文に引用されたり、古注だけを挙げて、そんなことは昔から分かっていた、と言わんばかりの扱われ方をされることがあるのを、黒須重彦「源氏物語探索」(平成九年 武蔵野書院)の「再度、夕顔という女」は具体的に例をあげて指弾している。氏には啞然たる思いがあつたに違いない。引用の仕方、というより執筆の姿勢をめぐる必読の文章である。

夕顔巻という論争的課題を扱ったので、とりとめなく研究の背後にまで筆が及んだ。